# のすたるじす第9号 目次

## 作品編


人詩　平凡仁　池田全
人詩　看官学　池田全
クラブにおせて
一我、愛する郷研一水野猛


## 特集


座談会　卒業生を囲んで

45年度　郷研の歩み

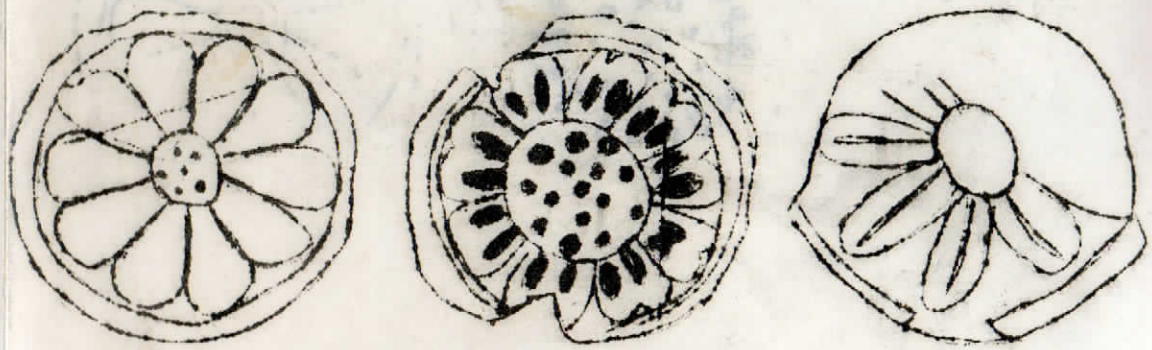
45年度　会計報告


表紙のカットは白鳳時代の瓦の紋です。

# No.5

# 郷研のすたるじす

卒業生特集号



郷研研究部

# 人間は弱いものである

平凡仁

人間は現在に至るまで、人間が理性的動物として存在している間は、瞬間を超え、超えて、普遍的に当する事実であ
論者は過去の人間の歴史においては、
的、反人間的事実を摘示して、それ
しも真理ではなかったと言うであろ
えば、宗教においては、異教徒や、
上に、異端者への迫害、中世にお
魔女裁判……又現在においても、反
原子戦争が行なわれ、その存在する
においては、単に不在的たる表明―
実質的内容の伴なわない―にすぎな
しかし、そこにおいては、異教徒や
は、自己とは異なる存在として認識
り、我々（当時の）人間とは異なる
してのみ認識されていたのであり、

又、戦時においては、生命の尊厳は認識されつつも、義務の衝突として殺戮が、つまり、自己の生命の尊さを認識しているが故に相手の生命を無視せざる負えなかったものであろう。よって生命の尊厳は従来より一般に肯定せられているのである。

それでは、何故に生命は尊しとなされるのであろうか。

生命と言うものを最広義に握握するならば、生物学的な意味における無機物に至るまでをもその範囲に含むものであり、その最広義の生命を考えるならば、人間ほど、自己の生命をもって、その他もろもろの生命の犠牲を強い、自己の生命を誇示しているものはない。しかし今はこの実は論外におく。

生命は何故に尊いか？―それは消滅する故である。生命のはかなさ、いやそれ以上に必ず消滅しなければならないと言う厳格さ故に尊いのである。この生命は必ず消滅

言う一事でも、て歴史は動いて来たとしても過言ではない。

が存在を認識するのは、その不存在故である。つまり、ある事象についてその否定面が存在する、ないしは、得るが故に、その事象の否定面が前れて、その肯定面を知り得るのであ
は死がある故に生でありかつ、尊い
る。言葉をかえれば、生は死によっ
その存在が認められるのであり、そ
時に死は生がある故に認められると
であるが、具体例を示すならば、よ
質問に、「あなたは、どんな時に幸
感じますか」と言うのがある。その
は応々、「死ぬ時に何の後悔もない
とかの様に、死の時を基準としてい
まり、我々の人生においては、常に
居の事実が厳然として存在している
る。我々の一生のあいだには、誰で
は死とはどんなものであるかと考え

てみたり、青春期には歌の文句ではないが着い死を夢みたりするものである―読者諸子にはどうかわからぬが、一般平均的人間ならば―、そこにおいては、我々は死への憧憬をもって同時に、非常な戦慄を感じるものである。それは常に、死の観念は、恐怖の観念と共存してるのである。この恐怖の故に、青年特有の死のあこがれがあるのだが。

死が、死の恐怖とともに観念せられるのは、死の厳然たる事実があり、又その事実が生者には誰も語ってくれない故に恐怖として存在するのである。人が間に恐怖を感じる様に。死の恐怖は常に病的なまでに誇張して語られ、問われる。その恐怖につかれたものは、決してのがれられないし、又死の恐怖の観念と交渉をもったものは、いつまでも、心から払拭出来ない。

我々は生命の尊厳さを言うと同時に、かにして生くべきかを考える。俗に言うさがい（由紀さおり!?）を求める事である。生の模索は、同時に死の模索である。「生」が生を有効に送る事は、死への完成へ近んでいるのである。これは尚も厳存実に生の結果が死であるとのみ言うのではない。我々の日常の生活の中には、生以上に死が存在しているのである！大部分は潜在的にではあるが！。こう言えば誰でも、今は、生の事としか考えていないと言うであろうが、生は死の土台の上にのみ存在し得るのであり、我々の全生活は死によって助長されているのである。我々が生命力をたくましく生きて行くのも、死が確実にせってくるためである。

我々が、本当に生の尊厳性を認識するには、死と生とをするどく対立させて、その解決、肉体において生を正しくとらえ、位置づけなければならない。生を生のみによって理解するならば、それは一面的な理解に終ってしまう、いやそれ以上に、真実は何も理解していない事になるであろう。我々は、真摯な態度でもって死をみつめながら生きねばならないのであり、死の観念には常につきまとっている死の恐怖を努力して排除し、何もののプリズムをも通していない死そのものを、そのままの形でみつめなければならない。

死は、我々の認識の客観面、外在的微面としては、事実であるが、自己の主観面においては、自己のものとして内在化されたものであり、それは観念でない、かつも観念らしい観念であり、現実せ、生とも対するものとしての本来的な思想は、自に内在化された死の観念の立場より生まるのである。

以上、がうりと趣を変えて、国語笑字より"臨終のことば"特集

。恐妻家ソクラテス、毒を仰いで死ぬとき「クリトーよ、エスキュラピアスに、鶏を借りてたぬ」と。

。クレオパトラは、まむしに肌をかませて死ぬのだが、籠の中の蛾を見て、「おや、お前、ここにいたの。」と。

。ゲーテ、「もっと光を！」

。日露戦争、戦死者、弾一つあたり候角々

。斉藤緑雨、新聞広告にて、「緑雨斉藤賢、本日目出度死去致候。此段謹告仕候也。」

。正岡子規、「おととひの紙仏の水も取らざりき」

「一、人間一匹
右返上申候、但時々幽霊となって出られ得る以特別御取計可被下候也。
明治三十四年
地水火風御中」

。石川一夢、「夢一つやぶれて蝶の行衛かな」

。自殺者、「うき世にあき果て申し候」

。藤村操、「人は不可解也」

。吉良上野介、「わしは暴力はきらいだ」

。不平屋、「ちくしょう」

。むじゃきな人、「ね、あたし死ぬの？」

。こらえ性のない人、「あいた・た・た・」

。坊主、「お経は自分からあげるから」

。医者、「薬がいけなかったんだね。」

。薬屋、「ヘボ医者にかかったのが運のさ。」

以上、うそかまことか？

（ひっしゃはほうがくぶせい。）

# 人詩

春宮学

私は生を思い
死を思う
もろもろの生を思い
その中の一個の人たるを思う
私は人間であり
人間でしかなく
過去永劫より流れ
人間たる存在の
一個の構成子たる自己
永劫とつづく
人間たる存在の
一個の構成子
それは人間として
人間の女を愛す
人間の女のかよわさ
人間の女のうつくしさ
人間の女のいとおしさ
人間の女のいじらしさ

永い航海に至り
いくたの海を越え
いくたの涙を流し
私には何がある だろう
何を貪りつくしたであろう
果して何を
何の知識を得ないのでは
万巻の書に接したとしても
結局 このおろかな私には
愚知にしかならない
その何たるかも知らない
ただ
幾多の変転の中で
美しいものは流らない
と言う事のみ知り得た
生命の美しさを
生命の実義を
これが一番の自然の美しさ
裸形の魂をはぐくむ
人間の

あらゆる物体の中で
人間ばかりなぜ うる
おしとしみを
いビロードを敷きつめた
祭壇の様な
ベルに
い光がうずまいている
足りと支柱のなり
の部屋に
の愛が
裸形の魂そはずして
の実在を示す
しく私たちは生きている
の愛するものと
人間である以前の人間として
然のままの姿で
らやむようなの光に
めらかくつつまれて
なめらかな肢体をおしみなく
そう美くしかがやかせて

私と向いあっていた
そのかがやきを
失しなわぬ程に
私は両手にいだきて
祭壇へ安置した
まるで御仏せる弥陀の様に

その静寂の中で
私はやさしく
双肢を左右に開いた
双肢のみを
吟味
この偉大なる展開よ
まるで真空になった様に
壁に引きつけられ
うっとりと
光につつまれたその双肢を
みとれた
あたかも御仏の
西方の姿の如く

私の眼には映った
すべての樹を
清あるに樹に
私の頭の活動を停止させた
知らずに私はひざまついていた
その瞬間はあたかも
一生の様に長かった
それから怪壇に向り
うやうやしく
うやうやしく合掌
うやうやしく頭をたれた
まるで信仰につかれた様に
畏怖し
やさしく
つつましやかた
ようやく私は
自分にかえり
光を背にうけ
窓きわに立って
彼女のすべての動きを

停止させた
あらゆるものから
神をうやまうようにまでなった
更にくわしく
更にたのしく
その瞬間は思実に
私の命令に従った
あたかも木の像の様に
冷然として
ゆわ伸ばし紙をそ
時作わづかに波うつ
腹部のみが生きている有さ
それも長く長く
丘の二を長く示す
真だらかな
この樹源郷
この全貌を
朝露の樹に濡れ
まろやかな香を放つ
この全貌を

この姓を
私は表わす言葉があろうか
私はもはや言葉を失なってしまった
口から出るのは
ただ感嘆の声のみ
すでに彼女の神は
私の着衣をぬいだ
どんどん一点に
凝聚された
そのすきとおった
扇のかなめに
その赤点を
紅と黒で彩色された
極彩色
そこに生きふく
花唇であり貝殻である
唇には
自らの姿に身をやく
このはかしさを
おおいかくすかの様に

可憐に蔵る
谷間の年
この全統を
人間の真理は
ここに始り
ここに終る
私の魂を
ふるえさせ
ふるいたたせた
女の生命を
アリストに愛し
わかにんげんたる
いのち
ここに
なもよ

―遺作集より―

人は
性があり、
死がある
男がい
女がいる。
誕生を生む。
それで終りだ。

言葉は、
発せられたとたん、
むなしくなる
文字は、
なおむなしい。

## 短い話

### 陸魚

海辺は今日もおだやかだった。
藍色の目をした子供がいう。
「だげど、オバケなんて、ほんとうにいるのかなあ」
彼は疑わしそうに、新式の水中銃をひらひらとふった。夏休みのために、前日買ってもらったばかりなのだ。
「もしオバケが出てきたら、ぼく、これで射ってやる」
「そんなもの役に立たんさ」
と、大柄の子がいった。彼はトビ色の目をしていた。
「陸の、ずっと奥にいるんだもの」
「どんなオバケが?」
「一つ目なんてやるがいる。そいつは、目が一つしきゃないんだ」
「ウソだい。一つ目なんて」
「だけど、もし一つ目が出てきたら?」
「そんなもん、いっこないよ」
「一つ目はあやしいとしても」と、大柄なトビ色の目をした子供はいった。「陸魚はたしかにいる」
「ウソだい。それも伝説だい!」
「だが、もし陸魚が本当に出てきたら?」
藍色の目の小柄な子は、おそるおそる陸魚を見やった。真赤な砂浜、そのむこうにつづく白い森。そこまでは彼らはいけないあの奥ぶかい森のどこかに、陸魚が本当に隠れているだろうか?
藍色の目の子は、びくつきながら考えてみた。陸魚はおどろくほど早く陸地をかけるそうだ。もしあの森から陸魚が出てきたら、ぼくは大急ぎで海に逃げる。だが、陸魚はいくらかは泳ぐというではないか、ぼくより早いかしら?なによりも、絵本で見た陸魚の形態が、心底から彼をおびやかした。いくらオバケだとはいえ、それはあまりにも恐ろしい姿だった。ふりあげた二本の手、そこに鉤のようについた五本の指、すっくと立った二本の足、なによりも、一つの目がランランと輝く二つの目。
「帰ろう。もう帰ろう」
と、幼い子は泣声をあげた。実際、彼の目はくしゃくしゃに歪んでいた。
「大丈夫さ。陸魚なんていやしないんだ」
大柄な子は言って、それでもやさしく色の目の子の肩を撫でた。
それから二人の子供は、三本ずつの手をひらひらと動かし、八つの目で水中をめながら、沖の方へ泳ぎはじめた。じき彼らは水中にもぐった。彼らの家のあるアルファ・ケンタウリ星の茶色の海の底。
(マンボウおもちゃ箱)より、盗作でした。

# クラブによせて
## ―我、受する郷研―

水野　猛

現在、我々の郷土研究会が、いかなる事態に直面しているだろうか、それを楽観的に観るにしろ、悲観的に観るにしろ、問題点を明確に分析し、認識せねばならない。この明確な分析に基づいた認識を指針として、我々のクラブの限りない発展を目指さねばならない。そのためには、二年、三年はまでの実践の中から、問題点を自己の内に、主体的に認識する必要がある。それは当然、部会での討論においてのみ、明確なものとなり、それでこそ、クラブを発展させる「具体的な力」となるであろうし、ならしめねばならない。そして一年生をどのように、この中に参加させていくかが、最も重要であり、そのことの成功、不成功が、郷研の未来をにぎるものと考える。そう考えた時、まず郷研の歴史とその中での問題点を、新入生諸君に伝える必要がある。

まず、「郷研」を看板として掲げたのは、五～六年前である。その母体となったのは、中部バスハイクサークル連盟に加盟、活動していた「バスハイクサークル」である。この「バスハイクサークル」の実際の活動内容がいかなるものであるかは、明確にはわからないが、そのおおかたの察しはつくであろう。その活動の内容の是非はともかく、その時点において、すなわち、「バスハイクサークル」から「郷研」に名目が変わった時点において、内容も変化した。すなわち、この時点で重要なことは、名目が変わったことではなく、「バスハイクサークル」内で生じた矛盾が、内容的にすなわち、質的に「郷研」へと変化せしめたことである。したがって、この点での矛盾、問題点を、現時点において、明確に分析することは、極めて現在的に大きな意義を持っていると考える。なぜならば、「郷研」へと名目が変わったこと、それ自体が、バスハイクサークル内での問題点を解決したのではなく、あくまで解決の方向へとスタートしたのみであるからだ。したがって、その問題点の解決そのものは、以後の「郷研」の活動そのものの中で、成就されるべきものであったからだ。したがって、その時点での問題点を分析してみることは、当時、以後の活動へ、ゆだねられた課題が現状ではどうなっているかを、明白にすることとなり、同時に、現時点での問題点も明白

会」という名称を付けた根拠である。言うなれば、この時点での「郷研」の現念である。すなわち「郷研」とは、何を、何をするサークルであったかということである。もちろん、この時点において、たとえ「郷研」たるものの、明確な現念があったにしろ、それは、何ら、現在のそれを規定するものではないし、将来のそれに対しても同様である。ここで、たとえといったのは、私はその時点において明確な理念が、あったかどうか、疑問に思うからである。私はむしろ、この名前は思い付きでしかなかったと思う。したがって、郷研の理念を明白にしてゆくことは、「郷研」にとって以後の重要な課題となったと考える。これは、しど

は、以後の実践の中から明確にすべきものであったし、それしか道はなかった。なぜならば、それが、実践に基づいた理念の認識でないならば、ただ、頭の中で、お遍路みたいに空回りするだけであるからだ。そう考えた時、はたしてこの課題が、それ以後意識的に追求されてきたであろうか、そして現在はどうであろう。私はこの点に関しては、きわめて悲観的である。この点は、後で再び、ふれるから、ここでは、問題提起として止めておいて、次に進む。「郷研」として出発した我々のクラブでは、次に大きな変化がある。この大きな変化とは……これは我々が先輩から、よく聞かされたが……、極めて重大なことであった。すなわち、それ以前においては、文献による研究はほとんど行なわれていなく、その方向での知識は、個人の興味へ委せられていた。そして、もっぱら、歴史的な跡を見て歩いていたに、とどまっていた。それが急に、部落動としての、文献による研究が行なわれるようになった。これは、実践の中から、「郷研」の理念の変化が確立されたことになる。しかしこれは個人的な意識の変化過程の現われでしかなく、サークル全体のものになりえなかったと考える。なぜならば、当日部員は、ともかくとして、実質的には二、三名でしかなかったからだ。そしてこの変化の過程で一年生はその過程へ主体的に参加するというよりはその過程から疎外され、そして個人的判断、選択へと直面させられたと考えられる。そういう場合の当然の結果として、その選択は二つにしぼられる。一つは「先輩の方針を承認＝クラブに残る」「不承認＝クラブを去る。」その結果は明白であり、二名を残して、他の一年生は全員クラブを去ることになった。まさに解放系集団における原理＝「疎外されたものは去るのみ」が作用したのである。これはサークルのような解放系集団においては、一つの安全弁として働く……良い意味につけ、悪い意味につけ……。そして、その集団内での、質的変化を極めてスムーズに消極的、かつ否定的方法で平衡に達せさせる。しかし、いっそう、やっかいなことは、このような質的変化そのものを極めて困難なものとする。なぜならば変化を起こさしめるほど内的矛盾が激化するのを、未然に消極的、否定的方法で防ぐ安全弁として働くからだ。そして、その集団を保

我「郷研」にもあてはめて考えてみる必要があろう。

一応、このようにして、我郷土研究会」は実地踏査を机上研究を二本の柱として再出発した。この内容を詳しくは述べない。なぜならば、我々が現在行なっている活動と基本的には、違ってはいない。ここでは、実地踏査、研究の内容、方法そして西年間における変化、その過程で起こってきた諸問題を分析し、それに基づいて、現状を考察し、その明確な認識に基づいて、これからのクラブの展望を早急に出す必要がある。

以上、「郷研」の歴史を述べたが、次に、一応過去四年の間に固定化してきた活動内容〜それは先にも述べたように多少の変

長所も考慮しながら検討してみよう。まずおおまかにいって、二本の柱・机上の文献研究とその発表」、そして「実地踏査及び春夏の合宿」。それに三本目の柱として「他大学との交流」。具体的には、班による毎週の研究とその発表、単発的実地踏査、春夏の合宿、名女大との交際、加えていうなれば、発表は現在のところ　名大祭に集約されている。他には、コンパ、文集、合宿など、が現時点での活動のすべてである。以上の活動の一つ一つを具体的に検討すべきである。それはクラブ員全員で行なわれるべきである。ゆえに、ここでは、その以前の問題、すなわち、我サークルで、このようなことが、意識的に行なわれていない現状を考察し、そこから、なんらかの有効なくくそれは将来への展望を切り開き、かつ具体的認識なり、展望を見いだそうと考える。

具体的には、①このクラブの現点での理念くくを意味するところが歪少化されること、②恐れず換言するならば、なぜ我々は郷土研究会で部活動を行なっているのか。ということくくがあるのか、ないのか。もしあるとするなら、いかなるものなのかを考察することである。はっきりいって、現在の我々のクラブには、この理念が欠けている。たとえ個人的には部員各々は、各自(異)なるサークル観を持っていたとしても、それがクラブという、個人から集団への参加の場へ発展的に提起されていない。すなわち各々が異なった理念を持ち(はたして実際には持っているかいないかは別として)クラブへ参加し、そして、し続けることが、クラブ員それぞれの自主性、主体性を保ったのに必要条件であるかの如く風潮がある。そしてそれを許容しあってゆくことが、クラブを完全に政風立てぬように保ってゆく、一つのテクニックであるかのような、考えがある。そのような表面的な安定、平和調和、発展をこのクラブに求めているのであろうか、否、我々はむしろ、そのような表面的集団、否、社会が我々のまわりに、つようよ存在していることに、むしろうんざりしているのではないか。なぜならば、そのような前提に立った集団は決して、我々の求めているものを満たしてはくれないだろうから。したがって、矛盾は、クラブの研究状態、組織状態、交流、名大祭、出席率、など諸々の特殊な形態をよそおってあらわれる。そしてそれらの問題点にぶつかるたびに、我々はその問題の本質が認識できず、いわんや、その認識を道具として、問題を解決することもできない。そして結局はすべての問題がうやむやのうちに、ほうむりさられる。それだけならまだしも、ほうむったはずの問題がほとんど周期的に、現われるので、我々は、ただその前でボウ然とし、目と耳をおさえ、台風が通り去るのを待つのが常であった。このことは、私が先に指摘した点、すなわち目的意識的に郷研の理念をそのサークル活動実践の中で追求せず、曖昧な許容を前提としている限り、続くであろう。そうすることによって得られる個人的自由、主体性とはいかなるものであろうか。ちょっと考えてみればわかる通り、それは部内での真の自由でもなければ、主体性でもない。ということは明白である。むしろ我々のすべてのものが、我々のすべての意志のもとにおいてなされるべき、サークル活動から、すべての

考察から導き出される結論は、小手先の問題処理を廃し、現在、我々のクラブに存在している形骸化した前提（これは我々の個人個人の外部はもちろん内部にも根をはっている）をわち破ることである。具体的には、先に述べた「理念」を討論し、一つの対立を恐れることなく、サークル活動・実践から遊離することなく継続的、かつ目的意識的に追求することである。この「理念」なる語は極めて誤解を受けやすいので多少付け加えておくならば、真の意味での「理念」は、そのものを、単独に頭の中だけで、そしてそれの前にすわって討論するだけでは得ることはできない。そのような実践から遊離した空虚な「理念」は、形式化され、観念的で、教条的となりやすい。それは、我々のサークル活動に対して、なんら有

動を形式的で空虚なものとし、[illegible]なるであろう。その意味において、真の理念は流動的である。流動的とはあくまで、確固としたものでなく、優柔不断であるということではない。「理念」そのものも、我々主体の成長にともなって変化発展するということである。したがって、実践は理念を生み、理念は実践を促すであろう。

我々「郷研」の実践、具体的にいうなれば、実地踏査、個人研究、レポート発表、合宿、名大祭、交流会などがいかなる理念に基づいているであろうかもちろん理念などなくても行動はできるが、しかしその行動は、明白な見通しと方向性を持たぬものであり、その意味でよりよい結果を生まないであろう。よい結果とは、我々の郷研活動を通して、個人に還元されるものであり、我

々が求める果実のことである。また、各々の活動は他の活動から切り離され、実地踏査は実地踏査、合宿は合宿、研究は研究とバラバラになり、それぞれが、特殊なよそおいを持って問題を生じる。そして、それをバラバラに現象論的段階問題把握で解決しようとするので、結局、お手あげとなってしまう。しかし、私が先に述べてきたことを考えてみるならば、それは、根底において、一つの源から発していることは明白である。

我郷研を発展させ、その活動の中で真の有意義なものを得るために、すべての部員がもう一度、自らが郷研に在籍していることへの問い分けから出発しようではないか。

# 特集

## 座談会――卒業生を囲んで

学生生活最後の四年間をすごした西川・寺本両先輩を囲んで多いに駄弁ろうという企画のもとで、追い出しコンパの前にテープにて集録されたものです。

そして、この会話は非常になごやかなうちに話が進み、郷研の歩みを知る上にも、あるいは以前にはこんなエピソードがあったのかと知る上にも大変役立つものだと思われます。

最後に、西川・寺本両先輩に感謝の意を表して、この序を終えたいと思います。

なお、伊藤・井村両先輩が都合のため出席できなかったことは非常に残念であったと思われます。

――自由に、思い出なんか語り合ってください。

堀井　ではまず、はいった時は何人位でしたか？

西川（孝）　6人。確か学生会館で四時半頃だったかなあ集まって僕と伊藤と杉浦と堀井と……。

堀井　今と同じですね。先輩は少なかったのですね。

西川　樋口さんと津坂さん、梶浦さんと永さんだね。

堀井　部長は？

西川　樋口さんかな。

堀井　その頃から新入生歓迎の実地踏査をやっていたの……？

西川　やってたのよ、桶狭間……。

北川　それから例年桶狭間……？（笑）

西川　いや前から桶狭間だったみたいだ。

青山　長久手へ行った時もあったんじゃない？

西川　そう二年の時ね。

寺本　寺本さんがはいった時は――遅かったの。

堀井　僕、五月三日、憲法記念日だね。新歓実踏の時。

北川　ああー、こうやって（何か腹を突出したような力ッコウして）、写真に写ったった時ね。黒いセーターで。（笑）

寺本　ヒャウハー、違うよ、それは何か合宿の時じゃないの、二年のときの。……彦根の佐和山の……。

青山　柳生へ行ったのは。

西川　あれははいる前。梶浦さんの時だな。何か県大といっしょになって（笑）

――（イイナという声アリ）――。

堀井　今から思えばな、今度は計画的にやらねば。

北川　その頃から県大とか名女大とかと交流をやっていたんですか。

西川　やってたよ。今程、さかんじゃなかったけど。（笑）

――（自分でさかんにしてという声アリ）――（笑）

西川　それを言うと……（笑）、あんまりやらなかったナ。

寺本　人数、定らずって。

西川　何うから断わられたナ。（笑）

北川　今とは大分違うね。（笑）

西川　あの頃はむこうの部長がしっかりとって、個人的にやるのはまずいと……。クラブ全体としては、いいけど個人的には……だと。

青山　では今の状態はマズイと……。

ごくまずいみたい。（笑）

西川　それはむこうの部長の考え一つで、かわるんだけど。

加藤　やっぱり上級生と下級生の男性の違いじゃないかな。（笑）

寺本　何か言っとるな。（笑）　二年生の

になって、ケイキようなったね。
井　その頃から、部会は土曜日？
川　いや、最初の時は土曜日じゃなくって、金曜日の四時半頃からやったんだね。だから、教養の時なんか僕なんか午後からの授業がなかったからね。四時半まで図書館で時間つぶしたりね。
西川　エッ、図書館。（笑）
西川　ウーン、勉強してたぞ。（笑）それから部会なんか雑談でほとんど終っちゃって。
西川　では、今とよく似てますね。（笑）内容が違うよ、内容が。
西川　――（アレアレ、もっとヒドインじゃないか。）（笑）
西川　イヤイヤ、もっと高しょうな話をしつとたぞ、（笑）、クラブの運営に関して、エヘヘヘヘ……。
北川　土曜日に変わったのは夏終った位だ
西川　それが最初、それで一つ思いでが

かな、やり始めた位から。
堀井　その頃から入会金百円。
西川　50円だった。……ああ、あれは入会金じゃない。百円だったよ。
寺本　あれ、あった。
西川　ウン、入会金は百円、部費は五十円。
――（ウン、今と同じだね。入会金とんかあったかという声もあり。）――
西川　最初、僕らがはいった時は一年生方が多い位、半分だったかな。だからはいった頃は一年生中心という感じで自由に何か言ったりして……。
堀井　西川さん、はいった時は名大祭にしては？
西川　エート、名古屋人と名古屋気質、れもやったし、僕（西川）が桶狭間やったよ。
西川　それが何回目？
西川　それが最初、それで一つ思いでが

あってなあ。
似は山岸さんと伊藤と組んだんだね。
例によって手伝ってもらう訳だな。（笑）それでむこうから来るわね。その時にさあ。その手伝ってもらった日の
その日が文化の日かなんかで休みだってね、丁度これはいいと思って、皆で桶狭間見に行くかといってね。（「サ！スガ」という声多数）（寺本：「それからあらゆる事が始まった。」）それでさあ。むこうが3人か4人でね。
こっち僕と山岸さんと伊藤と3人で。
この向うから来た彼女の一人が杉浦（孝）を近所でね。その娘を杉浦（孝）がやっぱりそっちってねえ。（よくあることだ）それで三年の子で一緒になっていろいろ、たらしいが、最近になって引れたとか、一「最近まで一」「
（年間位つき
あったというのもこ見
ないたという

青山　あのう方で（杉浦（孝）氏）、ずーっと
ういろおさかんだったんじゃない。
西川　あいつは今はほんとうに好きだど
一同　ワ――。（何のイミカ？）
西川　おれはおぜん立てはするけどなあ。
あんまり深入りはせん方でなあ。
郷研ですきなやつは杉浦（孝）だな。
笑）（誰か「自分のことをたなに」）
てという声あり」）今も……なん
やっとるとちがうか。ナスか、あ
ナスはオマエ（寺本氏に）か、彼
かなか影でコソコソと、クラブで
もなさそうな顔しとるけど、（笑
寺本　何もしとらんまな。何か言っと
コイツ……（笑）。
青山　もっと、暴露してもらわなきゃ
な。

堀井　一年の時の夏合宿はどこ……？

西者　あれは一番面白かったな。
西川　白川村・あれでね、最初どこへ行ったかな。
寺本　一番はじめはダムの採石場で……石がきのところ……。
西川　ダムの建設でしずむことになった村のその前でテントをはったんだ。その碑の前で・道路のわきに碑があってその前でテントをはったんだな。そうしたらなあー、ダンプが通るんだ・ドンドン・夜中火をたいとったら、ダンプのオッサンが怒りやがってな・何やっとんだってな。伊藤はそれで一晩中こわくて寝れなんだ。（笑）あんな、もうとびこまれたらオシマイダからな。（笑）下はゴロゴロした石なんだな。そこで寝たもんで、あくる朝はモウ腰は痛くて……。
堀井　時期は？
西川　八月終りだな。
北川　それから例年八月終り……。
西川　それでこの向津坂さんの所行っい出したんだけど。そのキャンプすね。本当はそこでするんじゃなく河原でするはずだったんだな。そたらその晩鉄砲水でさな、その河やられたらしいんだな（笑）（寺そうだったかな）・それで、これキャンプする時は気をつけてやらわんと。

教訓・教訓。

堀井　その時は泊りはテントばかりで
西川　イヤイヤ、初日テントで、二日テントでそうそう・雨が降って来・雷で。テントがビショビショになってな。
青山　それも台風の影響で。
西川　イヤそれはただの雷だった。とにかくテントがビショビショで困ってい

YAMATE

たら、丁度運よく近くに、トラックの倉庫があってなキッタナイ・そこへはいって雨やどりして寝たんだわ。そしたらこれくらいのブヨじゃない蜂の巣があってな、こわかったな。いつさされるかと思って。3日目は、公民館に泊ったんだろ。そうしたら好きなオッサンがはいって来て、ダイコンとか野菜をくれたがね。

今じゃ考えられんな、野菜も高くなったから。

西川　それで青年団だったか……。
寺本　あの時だった？　アレ違うだね。あれ別の時じゃなかった。キューリとか何かしらん放送やってくれて（笑）、野菜もって集まれ。あの時卓球やったんだがね。
堀井　あの時は相当、歩いたの？
寺本　歩いた歩いた、伊藤君なんか名駅帰って来て、意識あるかわからへんで。
西川　テントしょって一山越えたんだなり高い峠をな。樋口さんと山岸さんがタフなんだな。山岸さんはワンだし・樋口さんは湯の山の辺全部とるし、強いんだ。あの二人がどん行くもんでなあ。僕等は本当に休けい休けいって（笑）。
北川　寺本さんは下りは相当はせいんない。（笑）
西川　それで伊藤君がな。その一番ん時にテントをもったんだ。それはしなかっちゃって、ブったをれはしなかっど名古屋駅へ帰って来て、恒例のガーデンへ皆で行こうとしたら、伊藤君は「行きたない」と言って何かオカシかったな。あとから聞いたら、全然意識なって言とった。

寺本　あの時卓球やっとって俺が一番強かって、初めてやって一番強かったもんで、調子にのちゃって、ずーっとやっとったんだな。そのあくる日だもんで……。昔はどれくらい費用がかかりましたっけ。

寺本　あの頃は三一四千円。（「安い」という声あり。）何せ山岸さんが細かいんで三千円でどう食べるかなんて……。今なら交通費でパーだ。物価も上っとるし……。

寺本　食いものそういいものは食えんかった。交通も汽車のみで他は全部歩いた。

堀井　塚本が、今ここにおらんけど料理好きでな。卒先してやるんだ。（笑）人にやらせんもん。（笑）

西川　花むこ候補。

堀井　人が切っとってもそんなのあかんかんて、杉浦は何もやらんな食う、ばっかや。井村もやって、山岸さんまた好きだったな。あーいうこと。

寺本　それで高山の所回ったんでしょ。それで角川とかの公民館で泊ったんだ。あの時、雨だったな。

堀井　例年雨に降られるネエ。

西川　そうなんだ、降られるんだな。

寺本　だけど降られても運よく公民館かあって泊まれたんだね。その点ったね。歩く時は大ていいんだわ。夜降られる。

西川　それで、白川村へ行って、いつもランプやるんだな。あの時は山岸が好きでな、卒先してやっとったけど、夜、伊藤と二人で白川の合しょう造りの民家へ行ってな。そこのおばさんと話をして、そこでいろいろ面白い話を聞いて

、ほんとうに生きた体験をしたね。まあ、一年で一番面白かったのは合宿だわね。

堀井　秋休みは別に行かなかった？

長篠へ行ったね。

寺本　あの頃は一連の家康シリーズをやっていたね。あの時は長篠・静岡へ。

西川　その時、もう紹介ずみだけど、例の鉄橋な。

堀井　ああ、あの話ね。汽車が来んうちに渡らないかんというやつね。

寺本　鉄橋って？

西川　あの井村がな、線路に耳をつけて来へせんというもんでな、渡ろうって、渡りきったら、後からガアーっと。（笑）

寺本　あそこは地形的に線が曲っていて見えないんだね。

西川　それで一時よけるなんていうことはできないできない。下は河原だよ。

（笑）あの時は井村が言うので来るって思わんだろう。鉄橋の上で写真とったりして、ゆっくりしとって、わたりったとたんに、……びっくりしたな。

両者　静岡は登呂と臨済寺、中へはいったんかったけど、日本平と東照宮。

西川　家康関係で岡崎も行ったし、松平行ったし……。

寺本　松平は何べんも行ったね。その一つとして長久手もはいってきたんじゃない。実地踏査会で、あの時は歩いたけだね。

杉浦（孝）そう、新入生歓迎でね。

北川　そうすると、今の9人がはいってくる人だね。

西川　僕らがやったのは、ポスターを書いて、受け付けの時パンフを渡したんだな。今と一緒だよ。歓迎の時一人づつつかまえてな。その時のは、ほとんど入らなかったな。

寺本　何でもいいってわたしてたね。

西川　説明会の時に何人位来たかな。

寺本　大分いたね。十名前後かな。

西川　学館でやったんだね。池田君は覚えているんだわ。

寺本　杉浦君も覚えとるんだわ。

青山　杉浦君は名前を書いたんじゃない。

寺本　伴君もいた、水野もおった、そして女の子が来て……オー……。（笑）（オシカッタネ！）

西川　その前に一人（女の子）入ったんだワ……。

寺本　僕の前でしょ。義永さんたちのとき……。

西川　それでなんかさ、熱田から浦狭間まで歩いたらしいんだわ。それもなんか男といっしょのペースで歩いたらしいんだわ、それでなんか……。（笑）

青山　今の三年生の年度かなんかで入りかけたのではないの？

寺本　あの時は一回きてすぐ帰ったよね。

青山　あのとき、西川さんがね、瑞穂短大かな、と……。

西川　なんだったかな？

池田　瑞穂短大とさ、名大祭をはさんで……。

寺本　ウウン……。

西川　ウンウンウン、あったあった。

青山　あの時、僕らなんにも知らなかったのに。

西川　知らんかったて？

青山　むこうとどうなってるか。後からことわりたんでしょ。池田君がそれさいいにいったの学館でしょ。

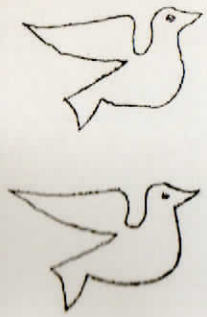
池田　僕がいったのは学館でしょ。

寺本　ウーン、そうか。ぼくらなんか……。

西川　僕らが3年のときだな、もうそれはあいつにしたときだな。高木に。

青山　フーン、まあそうだったかな。

西川　そうだったかではないよ。もう僕はかんちしていなかったよ。



青山　しかし、始めはな

水野　西川さんじゃない？

西川　あれはね、あれはね。（笑い）……そもそも、なれそめは名大祭に来たんだよ。そして、ほんで、いろいろとお知えてくれといってきたんだよ。そしてなんか資料なんか送ってくれよというんでさ、それとちがう。それだけだよ。

寺本　ウウン！

西川　僕はそれ以来なにもしてないよ。

杉浦　杉浦さんだよ。（笑い……）

西川　僕はぜんぜんただ、事務的にね……。（笑い）

寺本　なんか、そんなこと聞いたことあるね。

西川　それから、学館で集まってやったのは、知らないよ。あれは高木が企画してやったんだよ。あれはするのかしないのかって……。

寺本　ウン、なるほど。

西川　結局なんか、やらんことになって……。

堀井　津坂さんの上の人たちなんか、顔は知っているの？

西川　顔は見たことあるよ。

寺本　松山さん……。

西川　松山さん、片山さん。

寺本　津坂さんと片山さんがいっしょで……。

西川　松山さんがその上だね。

寺本　その上は知らないね。ああ、もう一人、小坂。僕はぜんぜん知らないけどね。

加藤　バスハイクのときの？

西川　津坂さんのときに郷研になったんだよね。

寺本　だからそのへんのところはあまり知らないね。坂さんとか、もう一人の……。

西川　松山さんも好きな人で、あの人が名女大とのそもなれそめ（笑い）……で、そんな話、聞いたよ。

堀井　エーート、そうするとかなり前から名大祭にかかわっているわけ？

西川　名大祭の展示は僕たちのときからだよ。

寺本　だいたいその前の頃は、なんかかってに好きなことをやっていればよかったんだよね。

西川　ウーン、定期的に部会なんてのはなかったんだよ。

寺本　部会のちょっとしたレポートをやりかけたのは

僕らの頃からだったね。

西川　そうだね、僕らの頃からだね。

寺本　その前のときは、こうやったらとか、こういう企画はとかいう話だったね。……だから名大祭の頃なんて必死でなかった。

西川　そうだったな。

寺本　必死というか、なにか……、だいたい先例がないでしょ。だからあのときは、一生懸命やってたよな。……ちがう、みんな一生懸命だけどさ、(笑)ほかのを見る時間が全々なかったもんね。

西川　ウン、なんか名大祭の合宿やったろ。呼鳴館なんかで、おもしろい話があるんだがな。あの集会室かな、あそこの二階から小便してさ、下におるんだわな、雨じゃないかって……(笑)。雨が降ってきたんじゃないかって、これは、だれがしたのか言わないけれどさ(笑)……。ある先輩が……。(笑)……。ある先輩がやったんだけどさ。

寺本　なにか……。

西川　僕たちのとき、先輩がいろいろな人がいたから、いろいろとおもしろいことを教えてもらったし、なにか合宿なんかあるとさ、山岸さんなんか特に、いろいろといいおもしろいことをひろうしてくれたし……。

青山　なんだの、それ。(笑)

北川　最近と昔とどうかわってきたの?

西川　最近と? それは変ってきて当然だと思うしね。去年なんか、いろいろの事じょうなんかあってきなかったしね。……北敦のしようもないし。しかし、まあふんいきとしては変わってきていよ。僕らが入った当時とね。だけど、僕らのはいろいろとまあ……、クラブをどうするかという話なんかあまりしなかったと思うしね。まあ歩いていろんな所をまわったというのがほどだったよね。僕らの時はね。

北川　最近、歩くのが少ないものね。

青山　それだし、野球らしいところは行かないもの。

寺本　だいたい歩くっていうか、ワンゲルではあれども、ああいう歩きかたというのか、あんなれるのはいやだけれども、なにか歩きたいとは来るでしょ。それだから……。

西川　今の、そうだな、三年生・二年生・一年生て、おそらく僕らとちがうところは、みんないいなにか小じんまりとまとまりすぎている感じがするね。

寺本　そういう感じがあるね。多分に、

西川　なにか一人、型破りの人がでてくれば、なにか面白くなるんじゃないかと思うんだけど、みんなネ似たりよったりの感じがするんだな。なにかね。一人がネ、ちがったこう……ちがった個性をだしてね。こう……。クラブというのは、雑談しとってもクラブというがね。又、クラブの活動と認めていいと思うけどね。

堀井　……あまり変らないから、そうすると、退部したという人はあまりいないの?

西川　そうだね、教養部のうちはちゃんと6人ネ。

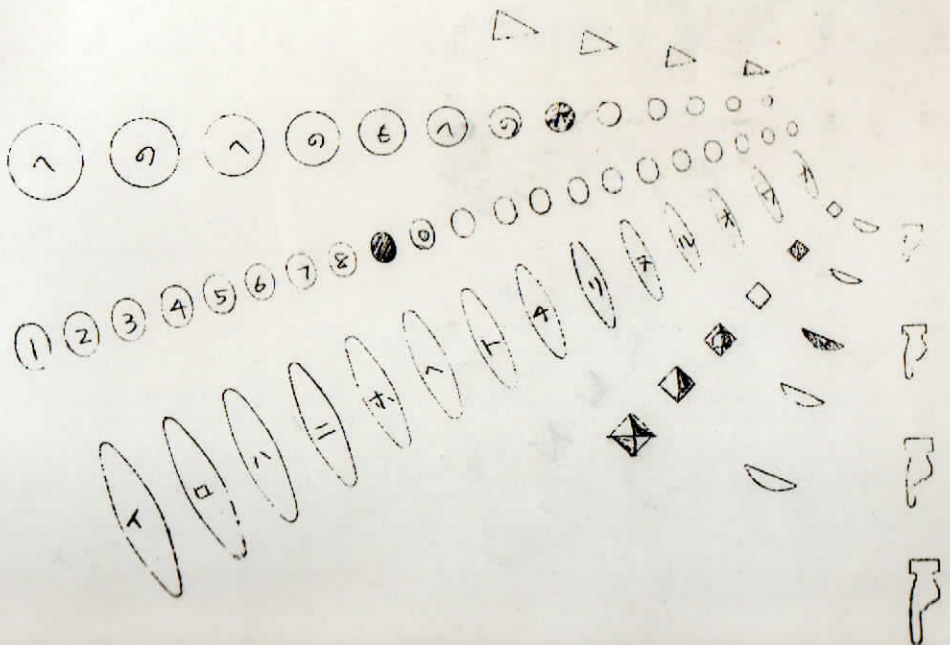
青山　僕等の2年生というのは、わりと変動が大きかったね。

加藤　半減したね。

寺本　今の三年生は強力だね。

北川　麻雀できたえたるからね。

西川　僕等の頃は、ほんとに真じ目だったか知らないけれど、タバコを吸う人はいなかったしね。僕の入



浦　なんか、……そんなこといっていかんに。（笑）
川　タバコをする人もいなかったし、麻雀する人もいなかったし、話にもでなかったよな。
本　あんまりやらなかったよな。
山　今の三年生のときから、いかれてきたのでは……
……？（笑）
影の声　そんなことないよな……。
浦　始めの頃は、みんなタバコは吸わなかったし、みんな……。
川　先輩が吸わんとだれもネ吸わんよ。僕らのときは、だれも、山岸さんとか樋口さんが吸わんかったしね。ウン……先輩の影響だな。
北川　タバコはテレビで宣伝しているものネ。
川　あのなあ――、おもしろいんだわ。最初の歓迎コンパで、伊藤がのびちゃったろ――。
本　僕は知らないけど、話では聞いたんだがね。
川　伊藤君がね、最初の歓迎コンパでさ、ぱーと飲んでね、ぶったおれちゃってさ、……そのときまでほんとに飲んだことなかったんだわ。ほんで飲まされてさ、のびちゃって……。ほんで津坂さんかいほうしていたんだわ……。
寺本　なんか、伊藤さんがぶったおれることばかりだ。（笑）……酒ぐせ悪いね……。
川　伊藤はそれから好きになったんだよ。酒な。
寺本　強くなったよね。昔なんかちまっと飲むとすぐちゃんだわ、なんか……（笑）……僕が入ったころたしかそうだったわ。それから今なんかだぶ……ネ。
堀井　その頃、ここ清風荘だったの？
寺本　そうじゃない。
川　いや、最初は伊勝庵でやったの。最初のコンパ、あのときは五、六人だったもんな。
北川　最近は、禁酒党が増えてきたよな。
川　昔大とね、僕らは、2、3回コンパをやったが、最近はもうぜんぜんないでしょ、もう。
寺本　ウン、どうしちゃったの？
北川　ウン、つぶれちゃったよネ。
ザワザワ……
寺本　これは、いいんでもいいだもん。

川　かなり、女生関係は宣言でな。（笑い）
寺本　なんか……。
川　県大のあの子とか……。
寺本　……、ほんとにやりにくいんだわ。
加藤　最初、クラブ入った時は、西川さんが一番という話があったね。
寺本　そうでしょ。
川　そんなことないって。ぼかあね。（笑）……。ぼかあさ、あの交渉やってたの、渉外か、一年のときから渉外やらされたの。後期から、県大の子とかさ、名女大の子とかさに電話連絡するだろ、それでこう自然と仲良くなるんだ。（笑）
寺本　非常にやりにくいな。（笑）
川　そのときはな、むこうの部長が非常に固いんだな。だから、そういう個人的なね、つきあいは、一さいさせないというの針なんだね、むこうのクラブの部長さんがね。そしてなんかやるでしょ、あの合ハイかなんか、ほんでねえ、今だと終って自然となごやかなムードでどこかへ行くわね、そのときはちがうもんね。なんか、部長がいちいち決断するわけだわ。いちおうこれで終りました。これからは、もう各自のみなさんの自由ですから、みなさんの自主性にまかせますと、そこでシラケちゃった……。
北川　今は、のりのりだもんね、3年生中心として。
川　のっとるなあ。
杉浦　関係ない……もう。
寺本　来年ぐらいは、カップルができて、発展があるじゃないかな。（笑）
北川　今年も、100％まともに、追い出せなかったでしょう。
川　ウーン、そういう伝統なんやて。
寺本　なんか伝統やね、どういうわけか。
川　もう、ずーっと続いとるんだよね。2位前から。
寺本　二年生から三年生へは、みんなスッと進むんだけど……。
川　ウン、そうそう、進むんだけどね。
北川　来年はどうなるでしょうね？
北田　さあ、女の子がたくさん入ってくるんじゃな
ザワザワ、……ザワザワ

堀井　ビラ、この間一二〇〇枚か、……あれ……出してもらったもんね。津田さんに書いてもらったもんね……。

北川　津田さんが書いたからさ、あれ、女の子的だよね……。

西川　ほんとか……。

寺本　いがいと、こう……女の子的発想だね。やわらかく。

西川　統計的にみるとさ、あれだな、ポスターのほうが有利だな。ビラなんかだめだな。

北川　いらんよ。だめだよ。

西川　文学連のやつに入れてもらったんだ。

寺本　それならいいね。

ウン。

だいたい、あれさ、もらってからさ、一生懸命見るんだよね。はじめて、うかって感激のあまり見るんだよ。

西川　はじめは、かっこいいクラブへ入ろうと思うけどさ、そうすると郷研なんかカットさ。

西川　ぼくはそういうことはなかったよ。ぼかあな、最初にな、教養のなあ、一階のあれだ、一階から二階へ上る階段のさ、とこへはってあってさ、あのねポスターがはってあってさ、自分は個人的にお城に非常に興味があるからね、だから、お城のあれがはってあってさ……なにか名古屋城のあれがはってあってさんだ。ほんだからさ、おもしろいなと思って入ってわけだ。

堀井　そうすると、なにかあの紹介のガリがきたの？

西川　紹介のきたよ。なにかさ授業が終ってさ、教室でな、たしかあれ梶浦さんだと思うがね、ばあっとってたけどさ、ほとんどだれも見ないね。くしゃくしゃとして、……あれはムダやね、やっぱしても。

北川　出さないのも、わからないしね。

西川　だから、ポスターをはっておけばいいわけだ。

杉浦　ポスターをはっておけばいいのだ。

堀井　寺本さんは、郷研へどういうきっかけで入ったですか？

寺本　ぼくは西川さん……、ぼくの上木、義永さん

ちょうど、あの名大祭の企画ね、僕も企画委員だったんだ。

堀井　ああ、あの名大祭の。

西川　ほんで、彼も企画だったんだ。

堀井　そこで知りあったの？

寺本　ほんで、彼は副委員長で、……それで面いとったんだわ、話をこういうものがあるっていうでね。僕も興味があったんだわね、そして、話しとって、又こんど実地踏査会があるということでね。なんかパンフレットをもらったんだね。それ見て、ほんで、神宮前で集まって、それから入ったわけだな……。

西川　そういうのが、案外多いね。

堀井　はじめ見たときさ、がっちりしてさ……（笑）……二束か、三束かと思ったよ、（笑）、がっちりしとるだろう。ほんとに、びっくりしちゃってさ……。

寺本　まったく、やりにくいなあー。

西川　はじめ、先輩かなあと思ったんだわ。（笑）……そうしたら、新入生だというだろ、……。

堀井　その頃から、やっぱし、これ（酒）のほうはいけたわけ？

西川　ビヤダルだもんな。（笑）

寺本　これ、ぜんぜん関係ないなあ。

西川　もう底なしだもうな。

寺本　今の、カット。

北川　カットなしだもん。

西川　ノーカット、ノーカット、今、ノーカットはやとるもんな。（笑）

堀井　その頃、今の文科系食堂というのは、西川さんが入ったときもうあったんですか？

西川　文科系、なかったよ。

堀井　なかったア、今の職員食堂とか？

西川　ああ、文科系はあったよ、南部がなかったんだ。今のロッカーのところに食堂があったね。

堀井　あの、図書館の下でしょ。

西川　そうそう。

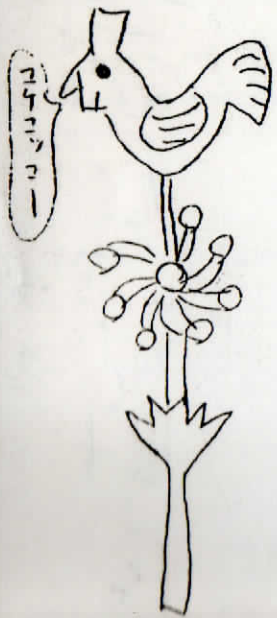
加藤　ちょっとえらいな、狭すぎて。

西川　せますぎる、せますぎる。もうひどいな。すちっとならんでな。そして、あそこにスナックがあったんだな、一つな、パンとかコーヒーとか飲めるちょっとした。

北川　パン・ミルクコーナーだね。
西川　そうそう、だいぶ変ったよね、教養もね。
　だいぶ変ったよね、単位が甘くなったもんね。(笑)
西川　変ったよな、教養もね、僕らの時はね、そうだね、問題がおきるよちはなかったね。なんか、ぬるま湯的感じで。そういう学生運動とか、そういうものがなかったというのか、三派か、そういうアジ等記とかそういうものが僕たちの一年の頃はまだなかったしね。
寺山　根はあったわけだわね？
西川　根はあったわね。
寺本　根はだから、名大祭の企画やね。そういうものの中にあったわけではないの。教養企画の中にも教養問題というようなものでね、……。
西川　ちょうど僕らが入った時はエンプラか、エンタープライズのあれで、一日ストライキやったぐらいかな。あんな程度でさ、そんなに激しいものではなかったね。
堀井　そうすると、学生大会なんかも、ひんぱんにやられていなかったわけ？
西川　だいたい僕たちの頃は、文科系と理科系に分れていてね。僕たちは第六講義室のあの大きいとこね。
堀井　文科系だけで？
西川　文科系だけで、いいかげんなもんだわね。
寺本　それで、いつも集会でしょ、当然。
西川　そうなんだわ、集会なんだわ。今なんか豊田を使うでしょ。僕らが入った頃なんて、豊田なんて名大祭と入学式と卒業式しか使わなかったな。なんか、一回使うと六万円位かかるとかかで……。
堀井　今の三年生の人も使えなかったんでしょ。
杉浦　そうだろな。
堀井　第六かなんかでやったとちがうの？
杉浦　教養前の広場でやったな。
堀井　囲んで？
杉浦　ほーん。
西川　今ほど、どういうんだ、俗にいう三派系のちが少なかったしな。まあ、シンパはたくさんかも知れないが、表面的に表われているのはったわけな。だけど、いろいろな問題はあったしな、いろいろな。講義が聞えないとか。
寺本　それもやっぱり、表面化されなかったわな。ただのつぶやきみたいに終ってしまったわね。
西川　つぶやきね。ロッカーほしいってその頃からいっていたしね。カバンもってあちこちしていたからね。ほんとに今はいいね。ロッカーもあるし。
北川　おかげで、クラブのものがガバッと入っとるよ。
西川　僕たちの入った時からクラブハウスつくろうといってたな……なんか資料センターつくろうって、かっこいいことといってさ……。
寺本　ああ、資料センターか、……ウン、どこか下宿においてさ……
西川　一時、あそこにさ、プレハブができたろ、たくさん……。僕たちのクラブでも女子連にはいっておればね、部室をくれたかもしれないんだよ。僕たちのクラブ女子連にはいっていないでしょ。
青山　あそこは、不便だしね。
加藤　寒いしね、冬なんか……。
北川　ところでね。OB会をやろうという話はあるしね。
西川　ウーン、OB会をやろうかって、このあいだ(去年の名大祭のとき手紙を)出したじゃん。
青山　やろうかって、……はどうなるでしょうね。
西川　もう、やることになったんだろ……、僕のほうの世話人になるしね、……だ、山岸さんとか堀口さんのほうに連絡をつけ
堀井　できたら、なるべくずーっと上のほうの先ね……。
西川　ウーン、津坂さんとはこのあいだ話をしてど……。
北川　そして、OB会費をガバッととるとかね……
西川　ウン、一年一回招待してもらうとか。(笑)ろ(部費を)値上げしてもいいのではないか
加藤　値上げをおさえています。(笑)
堀井　なにか、住所がおちついたら、知らせてもらいけないし。
北川　OBのきちっとした住所録をつくりたいしね。
西川　そうだな。
北川　知らないものね、上のちの人たち……。
青山　今までの、住所を書いたやつあるの？
寺本　昔の？
青山　いや、OBの。
寺本　昔のしかないし、あまり書いてないもの。

地方、いっとる人いるでしょ？
だからさ、今年まあ、樋口さんとか、そういう人と話してつくるわね。僕が、先輩のは。そして、つくって送るわ。こっちへ、そしてこっちで、だれかOB会との連絡役をつくって、そしてまあ……横関さとかなにか余ったら送ってほしいわね。
そしたら、なんか梶浦さんとこにしたらいいとかなんとかいっていたね。
ウーン、まだ一年残るからね。
なるべく、名古屋に残る人をね。……あらゆる連絡をみな、あそこにいけばね。
東京が多いでしょ。
東京支部とか。（笑い）
大阪支部とか。（笑い）
一人だけじゃん……（笑）、連絡をうまくつければいいしね。
年一回の総会を全国から集めて……。（笑）
名大祭のときやね。
名大祭のときだね、みなあいとるしね。
今年の名大祭っていつかうーもう決っとるとちがう。

北川　日日は知らないよね。
青山　七、八、九日頃からかな……？
堀井　そうしたら、集まってもらうの土曜日のいかな？
西川　ウン。
北川　看風荘が一番やりやすいね。
西川　ウン、そうだな。
北川　ウント、ボーナスが出るのはいつ頃かな？
西川　まだ、もらえんと思うよ。
寺本　七月か、八月だね。もう。
北川　そうすると、いかんね。その後にしようか？
西川　ださせんぞ。
北川　ところで、どうします、そろそろ飲みます？
西川　なんか、要望ないかね。一年生・二年生




からの。今までの反省とかさ。……追求してもいいよ。なんでもいいよ。
西川　少し、アルコールが入ってから。
西川　今日はなんでも答えるよ。
西川　なんか、約束できてるんでしょ？
西川　スケートに行く約束とか。（笑）なんですか。
寺本　もう少し……。
西川　もっとまじめな話いこうや、まじめな話を。
藤　一般的にいって、今度卒業されるかたは、かなり指導力があったとちがうの？
西川　表面的だわね。
藤　そうですか。
西川　中味がないね、……僕はそう思う。こちらは（寺本氏のほうに）どうか知らないが。
寺本　なにが……。指導力ってないね。ほんと、僕たちの上があったがね。
西川　そうだな、あったな。
青山　なんか、そういうものは先輩の徳というのかな、あるいは人間的なものかな。
西川　西方だな。
寺本　そうだろうな。……僕たちの時は、親しみとかそういうものがあったね。だから、いうのか、そういうところかもわからないしみがあ、たから、北敏的クラブとしてあったと思うしね。
堀井　自由に話しなんか……。
寺本　ウン！
西川　ぼかあ、一つね。……要望というのかきになるかしらないけど、まあ、特に一年たいんだけどね、ウン！……ほんとうって早いんだな（しみじみと）。いろんりたいやりたいと思っているうちに過ぎわな。だからね、まあ、クラブに限ってどね。まあ、何かクラブにね、自慢してもらいたいんだな。要するに、まあ、いや日本中でなくて、東京から名古屋までかね。……まあ、この辺の史蹟なら全るとかね。そういうね、なにか、自信をるものを残してもらいたいんだなあと思実は、僕はそれできなかったし、それだかみなさんにやってもらったらどうかなと思
堀井　今、話を聞いていると、外へ行ったこと

ているみたいな感じで。

西川　やっぱりそれが、一番残るしね、又、これから社会に出ていく中で一番役立つと思うしね。

堀井　……苦労した話とか。

西川　ウン、まあ、僕は、まじめな話もいいと思うけどね。ウンまあ、女の子とたくさんつきあったとか、それでも僕はいいと思うよ。僕は自慢できると思うんだよ、それでも、ある一面でね。要するに、なんかね平凡な人間になるなっていうことだよ。すなわち、あたりまえのことをしてあたりまえにすごすなっていうことだよ。僕がそうだったからね。これからのため……（笑）……。だから、後々まで、人の頭の中に残させるような人になってもらいたいと思うんだな。ちょっと、だまいきかな。僕の頭の中に残っているのは山岸さんとか、樋口さんとかが残っているんだな、先輩としてね。僕もそうなりたいし、若さんも後輩にそういう人間になってほしいしね。……ちょっときざだな。（笑）

高木　西川さんは、西川さんなりにな個性があったな。（……あるある。）

？　変な個性な。（笑）

杉浦　僕らも、みならうところがあるもんな。（……あ

ザワザワ……

西川　……要するに、いろんなところをバーッといいと思うな。最近、ほんとみんな歩かんな。歩かないかんと思うよ。

堀井　歩くと、なにかハプニングがおこってきて。

西川　そうなんだよ。ウン、それをまた、期待してはいかんけどな。……無我夢中でな、たくだけだ。

青山　行ってもさ、ただ……だでさ。

西川　それも、おもしろいんだな。思い出としてだなあ。

寺本　どこか行った時でもね、（まらんことかいが、正面攻撃だといってバーッと……行……。

西川　正面突破だといって、道もなんにもないとこパンとおりちゃってさ……。

寺本　観光ルートにね、のらないというのか、あまらなくてね、普通のこう、なんか面白半分というらおかしいけど、なんかやってみようというかつもりでやっているからさ、まあ、そこに面白たということがあると思うんだけどね。まあ、たい、そういう気持でのぞんでいるからさ、……

……なんか、やっぱり……。

西川　もう少し、郷研でね、特色を出さないかんと思うな、なんか今の郷研じゃ特色がないからね。だからな、もっと思いきったことをやるとか……それには歩くということが一番いいと思うしね。歩くことね。

堀井　西川さんたち、一年生のとき徹夜歩行なんて？

西川　やったよな、僕は行かんかったけど。

寺本　その前から……。

西川　その前はやってたよな。樋口さんとか、松山さんとかがやってたらしいけど。

寺本　だけど、あれも面白いはね。……やっぱり、車も少なくなるしね。又、別の世界が開けるでしょ。（ウン、カッコイイの声あり。）ほんとに面白いね。ほんとに星がきれいだものね。……ウン、まあ、当然かもしれないけど。

北川　名古屋で見ていると……。

寺本　あの時も、ウン驚いたということもないけどね。ウンやっぱり驚いたものね。星がきれいでね。こんなふうに見えるかなって。

青山　地方へ行けばぜんぜんちがうものね。

寺本　ウン、そういう意味でやっぱり、名古屋でているなら、一ペン位そういう所へ行ってね……、徹夜歩行してみたら面白いんじゃないかとんだけどな。夜、歩くということは、ウン何か行くという感じはないでしょ。ウン、そういうで、なにか歩くことと、夜歩をながめることつの意味があるんだな。

堀井　あれは気持ちいいですね。夏の頃で風が……

寺本　また、寒いときはいやだしね。……ウン、時期を選んで行かにゃいかんしね。

北川　雨に降られると大変だしね。

加藤　足がはれちゃって、まあ、あれだわ。

西川　まあ、なんべんでも言うけどもね。まあ思って、なんでもやったらいいんじゃないかと思。その……学生時代でしかできないしね。う、むちゃなことというか、自分のやりたいできるということが……。

---

さあ、飲みましょう。

飲むか、食べるかしよう。

腹、減った。！

（三月二十一日、青風

## 昭和45年度郷研のあゆみ

4月25日　新入生クラブ説明会

5月1日　新入生歓迎実地踏査会（松平―高月院）
4日　新入生歓迎コンパ（於、清風荘）
合宿（於、願成寺）
24日　名女大との合同ハイキング（森林公園）

6月6日　名大祭にむけての合宿（於、願成寺）
10日　名大祭のための合宿（於、徳伝寺）
10～14日　名大祭
11・12日　名女大よりの手伝い。
▸◂　夏合宿候補地決定

7月18日　徹夜歩行（柿野―明智）

8月20～24日　夏合宿（信州美が原）

9月　▸◂　テーマ決まらず。
9月末～10月初　前期試験

10月16日　踏査会（室生寺）
▸◂　新テーマ決まらず。
30日　名女大へ手伝いに行く。

11月2日　合宿（於、願成寺）
3日　名女大祭へ行く。
7日　コンパ（於、清風荘）
29日　踏査会（谷汲山・途中で雪に降られる）

12月　▸◂　研究面での低調さめだつ。
12日　交流会（於、名女大）
24日　「新入生歓迎号」半年遅れて完成。
25日　忘年会（於、清風荘）

1月16日　全学サッカー大会に出場（一回戦で付属高に惜敗）
23日　交流会（於、池の茶屋）
▸◂　春合宿候補地を決める。

2月　▸◂　後期試験

3月21日　追い出しコンパ（於、清風荘）
26～29日　春合宿（飛鳥・山の辺）
▸◂　新入生歓迎準備

反省　45年度は研究面での低調さが目につきます。

### 編集後記

▽才9号――も、ついに正例的に発行することができたことは、記念すべきことであります。とにかくOB会にはまにあった感じであります。

▽それにしても――今回の作品提出者が3名ということは、さみしいかぎり。次号に期待する。

▽珍事――前号にのせるはずであった45年度名大祭資料「岡崎城」の稿を紛失させてしまった。そのゆえはいかに？

▽関係ない事――深夜放送で「遠くへ行きたい」の曲が流れている、ーピこか遠く行きたい、遠い町、遠い海、夜……ひとり旅、愛する、とめぐり会いたい、どこか遠くへ

すたるじす 第9号
卒業生特集号
発行者　名古屋大学郷土研究会
発行日　昭和46年3月31日
印刷所　名古屋大学学館内印刷所
印刷日　昭和46年6月8日
編集委員　◇北川良二
津田陽子
設楽敏
加藤幸雄
印刷　堀新次雄・他
テープ　青山・北川
非売品につき市販されておりません。

昭45年度（S45.4〜S46.3）会計報告

収入

| | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 2812 |
| 入会金 部費 寄付 | 13632 |
| 割りもどし金 | 5950 |
| 合宿コンパ 残り | 2650 |
| その他 | 1500 |
| 計 | 26544 |

支出

| | |
|---|---|
| コピー用紙 原紙 マジック etc ) | 7750 |
| 写真代 アルバム.コーナー | 1870 |
| 合宿，コンパ | 5350 |
| 看板 | 3000 |
| 民主文学 | 220 |
| 計 | 18190円 |

残金

26544円 − 18190円 = 8354円